

第 12 回
全国果樹技術・経営コンクール
受賞者の概要

主 催 全国果樹技術・経営コンクール実行委員会
〔 全国農業協同組合中央会
全国農業協同組合連合会
日本園芸農業協同組合連合会
全国果樹研究連合会
財団法人中央果実生産出荷安定基金協会 〕

後 援 農 林 水 産 省
日 本 農 業 新 聞

第12回全国果樹技術・経営コンクール 受賞者

○農林水産大臣賞

大阪府	久禮 広一郎
広島県	沼隈町果樹園芸組合
愛媛県	玉井 健次
福岡県	福岡八女農業協同組合 キウイフルーツ部会

○農林水産省生産局長賞

青森県	外川 清孝
山梨県	フルーツ山梨農業協同組合 春日居支所 果実部
長野県	あづみ農業協同組合 果樹園芸専門委員会 りんご部会
静岡県	名倉 気津治
愛知県	鈴木 明
香川県	山下 知己

○全国農業協同組合中央会会長賞

山形県	JAさくらんぼひがしね 果樹協議会 もも部会
鳥取県	生橋 巧

○全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

福島県	蓬田 幸夫
山梨県	鈴木 東洋男

○日本園芸農業協同組合連合会会長賞

和歌山県	JA紀南 梅特別栽培研究会
大分県	大分県農業協同組合 大分宇佐柚子生産組合

○全国果樹研究連合会会長賞

北海道	藤谷 保宜
岩手県	小岩 克宏

○(財)中央果実生産出荷安定基金協会理事長賞

福島県	谷代 栄一
茨城県	下妻市果樹組合連合会 プロジェクトチーム

はじめに

全国果樹技術・経営コンクール実行委員会
委員長 吉 國 隆

当コンクールは、平成11年度から、生産技術や経営方式等において他の模範となる先進的な農業者、生産団体等を表彰し、その成果を広く紹介することにより、我が国果樹農業の発展に資することを目的として発足したものであります。

近年の果樹農業を取り巻く環境には誠に厳しいものがあり、高齢化の進展や後継者不足、耕作放棄地の増加等による生産基盤の脆弱化、長期化する消費不況による販売不振や資材費の高騰等による農業者所得の減少等さまざまな問題に直面しております。このような状況に対応し、昨年7月に新たな果樹農業振興基本方針が公表され、その基本方針の下、消費者ニーズに沿った品目・品種への転換、新たな加工需要の開発等果樹農家の経営安定や産地の活性化のための幅広い支援策が実施されるとともに、食育と一体となった「毎日くだもの200グラム運動」など果実の消費拡大対策の積極的な展開が図られております。

このような施策が所期の成果をあげるためには、関係者の主体的活動、とりわけ、産地の自助努力が必要かつ不可欠であり、産地振興の中核的役割を担っている方々の活動が最も重要であります。

このため、技術・経営のモデルとして受賞者の成果を広く普及するとともに、先進的な取り組みを実践している産地・生産者を励まし、施策の具体的な推進の中核的役割を担っていただくという視点から実施される当コンクールは、大変意義あるものと考えております。

第12回コンクールの受賞者の技術・経営の概要は以下に取りまとめられておりであります。いずれも、各地域において困難な諸条件を克服しつつ、独自の創意工夫や最新の知見の活用、計画的・効果的な投資、集団・地域の合意形成等主体的、積極的な実践によって、高い水準の技術・経営を身をもって達成し、他の模範となる方々であります。

受賞者の皆様には、長年にわたるご努力、ご研鑽に対し深く敬意を表し、心からのお祝いを申し上げますとともに、受賞を契機に、今後とも地域更には全国の果樹農業の中核的な先導者として一層ご活躍されるよう期待する次第であります。

終わりに、ご指導・ご協力を賜りました農林水産省をはじめ関係機関・団体の皆様、厳正な審査に当たられた審査委員の方々に対し、深甚の感謝を申し上げますとともに、引き続き本事業が多く果樹農業者の啓発や士気・意欲の高揚、更には我が国果樹農業の新たな発展に資する意義深いものとなるよう、今後ますますのご支援をお願い申し上げます。

農林水産大臣賞

- 大阪府 ^{きしわだし}岸和田市 (かんきつ、いちじく)
^{くれ こういちろう}久禮 広一郎

経営面積は 190a で、温州みかん 120a、はっさく 45a、いちじく 25a を栽培する温州みかんが基幹の果樹専業経営である。

経営面では、園内道の整備、造成による園地の傾斜緩和で作業性の向上を図り、コンパクト樹形と多目的スプリンクラを早期に導入するなど、かん水、収穫等の栽培管理作業を省力化し、主に夫婦だけの労働で、雇用労働に頼らない経営を展開している。

また、年間農作業時間の分散と増収のために、かんきつ以外にいちじくも栽培し、いずれも地域の単収を大幅に上回っている。これらの販売に当たっては、市場出荷に加え、宅配業者との提携で販売労力を軽減し、市場出荷より有利な価格で販売している。

技術面では、栽植本数を減らし受光態勢を整え、さらに、水分制御可能なマルチ栽培、ボックス栽培を早くから取り入れることで高品質みかんの生産に取り組んできた。

地域にあっては、4H クラブ等各種役職を歴任し、府認定の「農の匠」として後継者の育成に尽力し、農業大学校の実習や小学児童の農業体験学習も受け入れている。

- 広島県 ^{ふくやま}福山市 (ぶどう)
^{ぬまくま}沼隈町果樹園芸組合
(代表者 ^{よこい まさと}横井 昌登)

「マスカット・ベリーA」試作導入を契機に、昭和 29 年に設立された組合である。組合員 95 戸、ぶどう栽培面積 59.8ha、生産量 874t、出荷額 6 億 1 千万円超である。

平成元年から 10 年かけた再開発により、傾斜地のぶどう園を平坦地とし、園地を集約し、機械と施設の共同化、共同防除によりコストと労力を低減して、経営の安定と規模拡大を実現している。産地の基幹品種は種なしの「ニューベリーA」であるが、「ピオーネ」や新たなチャレンジ品種を加え、消費者ニーズの多様化に対応している。

技術面では、保温メッシュ栽培の推進により、秀品率の向上と長期間の継続した出荷を実現している。また、有機物主体の土作り、樹ごとのかん水システムと土壌水分計の設置により高品質果実生産に努めている。出荷前には、標準品出荷査定会で糖・酸度検定を行い、個々の組合員の出荷開始日を決定するなど、徹底した品質管理を行っている。

販売面では、JA と連携し全量共販による出荷で、市場、生協とゆうパックなど契約販売、産地直売を行い、さらに海外への輸出を拡大するなど販路拡大を図っている。

○ 愛媛県 ^{やわたはま}八幡浜市 (かんきつ)
^{たまい}玉井 ^{けんじ}健次

経営面積は 275a で、温州みかん 128a (施設 18a、露地 110a)、「せとか」(施設) を 26a、「清見」(露地) 40a、その他中晩柑 81a を栽培するかんきつ専作経営である。

経営面では、高収益を得られる施設栽培と露地栽培の複合経営で、施設栽培は温州みかんに中晩柑「せとか」も加え、経営の危険分散と施設管理の労力分散を図っている。

技術面では、施設栽培においてはきめ細かな剪定と肥培管理の徹底により、10a 当たり温州みかんで 8t、「せとか」で 4.2t と県平均の約 30%増の高収量を得ている。また、重油対策として、ヒートポンプの導入で重油使用量 54%削減を実現している。

急傾斜地の多い露地栽培の園地ではスプリンクラ、モノレールなどの導入による機械化と園内作業道設置で軽労化と作業の効率化を図っている。

地域では、多くの生産者が視察に訪れる模範となる高い生産技術があり、柑橘共同選果部会の副会長として、生産や販売対策、部会の特殊商材「^{みつ}蜜る」のブランド化、ポスト伊予柑の新品種の導入にも尽力し、地域農業振興に先導的な役割を果たしている。

○ 福岡県 ^{やめ}八女市 (キウイフルーツ)
^{ふくおかやめ}福岡八女農業協同組合キウイフルーツ部会
(代表者 ^{ひがし}東 ^{こうじ}孝治)

平成 8 年の JA の広域合併を契機に、平成 9 年に設立された J A の部会。572 戸がキウイフルーツを 220ha 栽培し、生産量は 5097t、出荷額は 16 億円超である。

低温貯蔵庫、追熟施設、光センサー選別選果場を整備し、12~4 月の長期にわたって美味しい果実の安定出荷を実現している。特に、全国に先駆けて実施した産地追熟処理により、高糖度保証の食べ頃キウイフルーツ「^{はかたうれっこ}博多甘熟娘」などのブランド商品を確立している。

「生産基本方針」の作成・配布、講習会での技術情報提供と現地視察、品質を揃える「園地評価」を実施し、生産管理と品質の高位平準化を図っている。

技術面では、傾斜地に適したオールバック 1 本主枝樹形を導入して樹形を単純化することで剪定・誘引作業を効率化し、溶液受粉技術の実践とともに、栽培管理作業の省力化に取り組み、高齢化や規模拡大に対応している。また、収穫期が 1 カ月早い優良新品種「レインボーレッド」を導入し、新たな需要の創出と労働力分散にも取り組んでいる。

環境面では、部会全体で、生産履歴記帳、JA ふくおか八女版 GAP、残留農薬検査を実施し、消費者へ安全・安心な果実を届けられるように努めている。

農林水産省生産局長賞

- 青森県 ^{ひらかわ}平川市 (りんご)
^{そとかわ}外川 ^{きよたか}清孝

経営面積は 900a で、大規模なりんご専作経営であり、550a がわい化栽培園である。

経営面では、自宅近郊の園地を集積し、園地の 60%をわい化栽培とすることにより規模拡大と省力化を実現している。さらに、着色管理が容易で省力化が可能な着色系品種や黄色系品種を積極的に導入している。JA 出荷に加え、通信販売による宅配、量販店出荷で販売チャンネルの多様化を図り、規格外りんごはジュースに加工して販売し、安定した収益を確保している。

技術面では、市の委託を受け「21 世紀型わい化モデル園」を設置し、わい化園地の早期成園化のための大苗移植栽培や、自園で選抜しブランド品種として育成した着色系早生つがるや早生ふじの栽培・展示を行い、市における新技術普及の拠点となっている。さらに、自園で発生した剪定枝をチップ化・堆肥化处理して自園に戻して活用する環境循環型農業、牛糞堆肥主体の徹底した土作り、エコファーマーとして減農薬栽培にも取り組むなど、環境にやさしく安全・安心なりんご生産を実現している。

- 山梨県 ^{ふえふき}笛吹市 (もも、ぶどう)
フルーツ山梨農業協同組合春日居支所果実部
(代表者 ^{いちかわ}市川 ^{としお}俊夫)

昭和 28 年に創設され、平成 13 年の J A の広域合併により、現在の組織として再発足した共同選果・共同出荷販売組織である。部会員 215 戸が、ももを 68ha、ぶどうを 8ha 栽培し、生産量は 1538t、出荷額は 7 億 1 千万円超である。

当果実部のブランド「かすがいの桃」は極めて高品質で、その単価は県平均より 2 割以上高くなっている。鮮度重視で 100km 圏内の京浜地域出荷にこだわり、6 月下旬～8 月下旬までの切れ間のない出荷で有利販売と高価格を実現している。また、光センサー選果データを部会員にフィードバックし、適熟収穫などに活かしている。

技術面では、全品種有袋栽培、着果量制限、収穫前のほ場巡回で、大玉・糖度・着色・熟度が全て揃った高品質果実を安定生産している。さらに、毎年、地区毎の栽培技術講習会、品種毎の出荷目合わせ会できめ細かな指導を行っている。

環境面では、全員がエコファーマーであり、部会一丸となり GAP などに取り組み、「かすがい安心・安全・高品質 7 か条」を策定し、安全・安心の環境保全型農業を推進している。

○ 長野県 ^{あづみの}安曇野市、^{まつもと}松本市 (りんご)

あづみ農業協同組合 果樹園芸専門委員会 りんご部会
(代表者 ^{にしまさ}西牧 ^{しみず}清水)

昭和 60 年設立のりんごの生産者組織で、部会員 747 戸が、りんごを 450ha 栽培し、生産量は 7361t、出荷額は 19 億円超である。

栽培技術面では、地区に合う「ふじ」「つがる」の『着色系統』を選び品種系統を部会として統一し、全てを無袋栽培で、味と着色に重点をおいた栽培を実現している。また、設立当初からおい化栽培を導入している県のおい化栽培の先進地であり、その普及率は 97%と県平均の 2 倍以上と群を抜いている。

また、従来のおい化栽培よりもさらに早期多収、品質の向上・均一化、労働力軽減が可能なフェザー苗木を利用した「新おい化栽培」の普及も進んでいる。

さらに、部会全体で晩生の「ふじ」偏重を見直し、出荷時期が早い県オリジナル品種「シナノスイート」などへ転換し、出荷時期の分散、労働力の確保と分散を図っている。

環境面では、トレーサビリティ、ポジティブリスト対応を徹底し、GAP に取り組むなど、安全・安心な果実の生産・販売に部会として積極的に対応している。

○ 静岡県 ^{はままつ}浜松市 (かんきつ)
^{なぐら}名倉 ^{きつじ}気津治

経営面積は 291a で、果樹園 255a のうちハウスみかんを 53a、露地みかんを 97a、施設中晩柑を 63a、露地中晩柑を 42a 栽培するかんきつ専作経営である。

経営面では、平成 15 年の重油高騰をきっかけに、ハウスみかん施設に加温省エネ設備を導入して重油使用量を大幅に削減し、また、施設の一部を中晩柑の屋根掛け栽培へ変換して経費の削減を図っている。同時に、近隣の耕作放棄地を借地して規模拡大し、ハウスみかんから、露地みかん、施設中晩柑、露地中晩柑も取り入れ、出荷期間を長くすることで価格変動と自然災害の危険分散を図っている。

技術面では、苗木は肥料袋で大苗を育成し、改植時には連作障害防止のために移植樹を中心に新土を施用するなど、早期成園化と樹の健全な育成を実現している。地域にあつては、県農業経営士会果樹部会長、認定農業者協議会支部長として活躍するほか、JA の中晩柑部会の「せとかグループ」を立ち上げ、会員をリードしている。

○ 愛知県 ^{こまき}小牧市 (もも)
^{すずき}鈴木 ^{あきら}明

経営面積は 97a で、もも専作経営で地域では有数の大規模経営である。

経営面では、早生～晩生種の品種構成の工夫で、労力分散と収穫販売期間の長期化を図っている。早生種は無袋栽培とし、スピードスプレーヤ、電動剪定ばさみなどの機械導入を進め、省力化を実現している。また、販売面では、市場出荷以外に、直売、宅配、菓子製造会社との契約販売を積極的に取り入れ、経営の安定を図っている。

技術面では、毎年の有機物資材投入による徹底した土作りを行い、根域を地下 30cm にまで広げて、10a 当たり収量が「白鳳」で地域平均の 1.5 倍を超え、県内トップクラスのもも栽培を実現している。また、二本主枝整枝法を導入して栽培管理作業の省力化を行っており、本法は樹全体の日当たりが良く果実品質向上にも結びついている。

地域にあっては、もも生産部会長などの役員を歴任し、部会の育成や栽培技術の向上、病虫害発生予察活動に基づく防除体系の確立に貢献しているほか、県及び地域の果樹振興会もも部会長を務め、もも産地としての発展に寄与している。

○ 香川県 ^{たかまつ}高松市 (かんきつ、びわ)
^{やました}山下 ^{ともみ}知己

経営面積は 185a で、温州みかんを 146a (露地 132a、温室 14a)、中晩柑を 22a、びわを 17a 栽培するかんきつ中心の果樹専業経営である。

経営面では、貯蔵みかんと温室みかんに中晩柑とびわを組み合わせて、単価で年次変動のある露地みかんの危険分散を図り、それぞれの労働ピークが重ならないバランスのある労働体系を確立している。また、重油対策として、施設へのビニールの三重被覆の導入、屋根掛け越冬栽培への転換、「せとか」の無加温ハウス栽培導入で低コスト化と有利販売を実現している。びわでは量販店と契約の「エコびわ」で有利販売も行っている。

技術面では、隔年結果しやすい高糖系温州「青島温州」「大津 4 号」では樹別交互結実栽培を導入し、毎年安定した高品質の中玉果生産を実現している。「不知火」の長期貯蔵、びわ「陽玉」の導入などの新技術や新品種の導入にも積極的に取り組んでいる。

地域にあっては、JA の地域びわ部会長、県果樹研究同志会びわ部会長として県全体のびわ振興に貢献している。

全国農業協同組合中央会会長賞

- 山形県 ^{ひがしね}東根市 (もも)

JA さくらんぼひがしね果樹協議会もも部会

(代表者 ^{たかはし}高橋 ^{はやと} 勇人)

JA 合併を契機に平成元年に設立した選果場共同利用組織で、会員数は 301 名。栽培面積は 83.3ha、生産量は 1514t、出荷額は 3 億 3 千万円超である。

光センサー選果による食味を重視した果実出荷で市場、消費者の信頼を得るとともに、糖度 15%以上の最高品質果実をプレミアムブランド「横綱印」として出荷し、有利販売している。毎年、数回の勉強会と主力品種「川中島白桃」の立木審査会、品評会を行い、栽培技術の向上と品質の平準化を図っている。また、生産者や園地毎の光センサー選果データを集計し、高果実品質生産に向けた栽培管理の改善に役立っている。

また、「最高の味」と評価されるが、栽培が困難とされていた他県の民間育成品種を「いけだ」と命名し、その栽培技術を確立し、東根特産として産地化しており、「川中島白桃」「あかつき」に続く部会の主要品種の 1 つとなっている。

環境面では、部会員全員がエコファーマーであり、フェロモントラップを用いた害虫発生予察による適期防除、有機物を主体とした施肥を実践するなど、環境に配慮した果実生産を実施している。

- 鳥取県 ^{とうはく}東伯郡^{ほくえい}北栄町 (なし)
^{いくはし}生橋 ^{たくみ} 巧

経営面積は 143a で、うち果樹園 75a 及び花き 43a 等を栽培する果樹中心の複合経営であり、果樹はなしの専作経営である。

経営面では、早生種、中生種、晩生種とハウスを用いた異なる作型の組合せで、労力分散を図り、雇用労働に頼らない自己完結型経営を実現している。また、スピードスプレーヤ、乗用草刈機、トラクタ等の機械導入により省力化を図っている。

技術面では、かん水はかん水チューブを果樹棚上に配置する独自方式を採用し、主に梅雨明けから実施することで、干ばつ年でも玉太りはよく、増収をもたらしている。また、ポジティブリスト制度に対応した農薬使用履歴の記帳、性フェロモン剤利用の省農薬防除暦を採用するなど、環境に優しく安全・安心な果実生産を実践している。

地域にあっては、JA の生産部の役職、地区農業士会会長を務め、地域果実振興のリーダー的役割を果たしている。また、試験場、JA と連携して新技術・新品種の実証試験に協力し、施設の導入、効果的なかん水方法などの普及面でも地域に貢献している。

全国農業協同組合連合会経営管理委員会会長賞

- 福島県 伊達郡桑折町 (もも)
よもぎだ 幸夫
蓬田 幸夫

経営面積は 331a で、うち果樹園 247a 及び水稲 44a などを栽培するももを基幹とする複合経営である。

経営面では、いち早く有望新品種を試作・選抜し、早生～晩生の多品種栽培で収穫期間分散と長期間出荷により安定した販売実績を上げている。また、各品種の収穫面積は、自家労働力内で可能な面積にとどめて、労力分散している。

技術面では、高所作業車、摘蕾機等を導入し、労力削減と省力化を図っている。病害虫の発生予察に基づく適期防除、性フェロモン剤活用による殺虫剤の 50%削減、牛糞モミガラ^ミの完熟堆肥を有機質として施用し地力増進に努めるなど、エコファーマーとして環境と共生する農業を実践している。

地域にあっては、JA のもも生産部会長として「ピーチロードをゆっくり歩こう会」を毎年開催して販路拡大を図り、支部においては 16 年連続している「献上ももの里」としての名声を支えるなど、産地イメージアップに貢献している。実践的な指導を行う「初めてのもも栽培講習会」を開講し、後継者育成にも努めている。

- 山梨県 笛吹市 (すもも、もも)
すずき 東洋男
鈴木 東洋男

経営面積は 115a で、うち果樹園 105a にすもも 47a、もも 58a を栽培する果樹中心の複合経営で、他に畑作 10a がある。

経営面では、すももとももの品種の組合せと仕立て方の工夫で、収穫時期の労力分散と省力化を図り、夫婦 2 人のみの労力に極力抑えて収益を高めている。すももは低樹高の棚栽培で省力・高品質化を確保し、ももについても低樹高栽培に取り組んでいる。

技術面では、結実確保の難しいすもも「貴陽」において良い受粉樹を独自に選抜、徹底した受粉、防霜ファンの設置及び新梢管理の徹底により充実した結果枝の確保などで安定した結実を図っている。また、交信攪乱剤の使用、病害虫発生に応じた適期防除、土壌分析に基づく施肥設計とともに、有機物主体の施用を行い、エコファーマーとして積極的に環境保全型農業に取り組み、安全・安心な果実を提供している。

地域にあっては、JA の各部会の役員を歴任し、優良新品種の導入・普及、品質向上に努めるなど、果樹産地発展の牽引役となっている。

日本園芸農業協同組合連合会会長賞

- 和歌山県 ^{たなべ} 田辺市 (うめ)
JA ^{きなんうめとくべつさいばい} 紀南梅特別栽培研究会
(代表者 ^{ほうにん} 法忍 ^{たけふみ} 岳史)

平成 9 年に、環境にやさしい低コスト栽培を目指して梅研究会組織として発足。会員 42 戸が、うめを 16.2ha 栽培し、生産量は 231t、出荷額は 9 千 2 百万円超である。

平成 14 年に県特別栽培農産物認証を取得し、生産された「特別栽培南高梅」は JA への委託販売として出荷し、チョーヤ梅酒や量販店に流通し、さらに、平成 16 年にはイオンのグリーンアイ商品としても登録・流通している。

県の特別栽培農産物基準に加え研究会独自の基準を設け、性フェロモン剤によるコストカシバ防除、除草剤を用いないナギナタガヤを利用した草生栽培の導入、有機質 100% の無化学肥料・土壌改良材の使用など環境にやさしい栽培方法を取り入れている。独自の GAP チェックシートで、土づくり、農薬ドリフト対策等に取り組むとともに、会員全員がエコファーマーを取得している。

こうした研究会の活動は、紀南地域の環境保全型農業の先進事例として、他の生産者の環境に配慮した農業の実践を喚起している。

- 大分県 ^{うさき} 宇佐市 (ゆず)
大分県農業協同組合 ^{おおいたうさきゆず} 大分宇佐柚子生産組合
(代表者 ^{たなか} 田中 ^{のりひさ} 憲久)

昭和 42 年設立で、組合員数は 81 戸である。ゆずを 35ha 栽培し、生産量 336t、出荷額は青果、加工用を合わせて 4 千 6 百万円超である。

集団活動として、栽培講習会やゆず出荷目揃い会で生産技術の向上を図っているほか、市場との販売促進などの各種活動を行っている。栽培講習会では樹高切り下げや誘引による低樹高化を進め、管理しやすい園地を確保し、栽培管理の効率化を図っている。

作業委託や園地貸借により、高齢化で管理が困難な遊休農地の解消を図り、生産団地の維持に取り組んでおり、ゆず果汁需要の高まりもあり、新植の拡大が進められている。

組合員一丸となり取り組む出荷目揃えの実施により、出荷基準の遵守が図られ、青果は市場で高い評価を得ている。

出荷の 9 割を占める加工用原料は集団組織の農産物加工処理施設で果汁の搾汁、特産のゆずこしょう、ジャムなどの加工品製造に取り組んでおり、加工品の製造販売による地域女性活動の活性化など、地域農業の振興に貢献している。

全国果樹研究連合会会長賞

- 北海道 ^{ふかがわ}深川市 (りんご、おうとう、プルーン等)
^{ふじたに}藤谷 ^{やすよし}保宜

経営面積は 827a で、うち果樹園 360a にりんご 300a、おうとう 20a、プルーン 20a のほか多品目栽培に取り組んでおり、他は畑作で果樹・畑作複合経営である。

経営面では、りんごを主体とした観光果樹の経営で、直売を中心にもぎとりやゆうパックなどの委託販売でほぼ全量を個人販売している。また、7～11 月までの長期間の収穫体験ができる多数の品目・品種構成で植栽し、こまめな機械除草や病害虫罹病果を除去して園地清掃に努め、「ふれあい農園の登録」など園地のイメージアップを図り、魅力ある園地作りを心がけている。さらに、農業体験組織「夢の農村塾」のメンバーとして積極的に体験学習を受け入れるなど、消費者との交流を大切にしている。

技術面では、わい化栽培、摘花と薬剤摘果、着色系や黄色系品種の比率を高めるなど栽培管理の省力化を図っている。りんごは樹齢 15～18 年生で計画的に更新し、収量性、作業性、耐病性を高め、生産量の安定を図っている。

地域にあっては、果樹組合の組合長として、地域の農業振興に大きく貢献している。

- 岩手県 ^{いちのせき}一関市 (りんご)
^{こいわ}小岩 ^{かつひろ}克宏

経営面積は 575a で、うち果樹園が 500a、水稲などが 75a である。

経営面では、労力平準化のため、中生種の割合を増やし、晩生種「ふじ」の割合を全国や県平均に比べ大幅に減らしている。また、着色管理が不要な黄色品種の栽培面積を 3 割（県平均の 2 倍）として省力化を進めている。販売では、JA 出荷以外にも、贈答用直販、自ら経営する直売所での販売など、販売チャンネルを拡大している。

技術面では、幼木期にバランスの良い側枝を 10～20 本確保することで、主幹の伸長を抑制し、脚立を使わずに 8 割の管理作業が可能な低樹高栽培を実現している。また、JM 台木と自園地で採取の優良穂木を用いて苗木を自家増殖して経費を節減し、ポット養成苗による大苗移植栽培で早期成園化、未収益期間の短縮を実践している。

地域にあっては、JA の果樹生産部会長などを務め、販促活動の先導、安全・安心で環境に配慮した生産、優良新品種の導入、農業者育成に尽力し、全国りんご研究大会では県代表で優良事例を発表するなど、地域のリーダーとして幅広く活躍している。

(財) 中央果実生産出荷安定基金協会理事長賞

- 福島県 ^{こおりやま}郡山市 (なし、ぶどう、おうとう)
^{やしろ}谷代 ^{えいいち}栄一

経営面積は 345a で、うち果樹園 130a に、なし 90a、ぶどう 30a、おうとう 10a 及び水稲 202a などを栽培する果樹・水稲複合経営である。

経営面では、就農時からなし栽培に取り組み、老木樹を収益性の高い「豊水」「涼豊」「あきづき」などの品種構成に改善を進めている。さらに、新規品目として、おうとう、ぶどう「あづましずく」を導入し、多品目栽培化で収穫労力分散を実現している。また、おうとう、ぶどうの販売は直売を主とし、販売コストの低減を図っている。

技術面では、全国で例のない梨棚を利用した「ぶどう栽培」の確立や「新短梢栽培」を導入し、労働力軽減を図っている。また、低化学肥料、低農薬、防風ネットの設置による農薬飛散防止など、エコファーマーとして安全で安心な農産物生産に努めている。

地域にあっては、JA の郡山市果樹部会長、支部梨生産部会長として、JA において光センサー選果機を導入して高品質なし供給体制の確立に尽力するとともに、ブランド認証商品「郡山の梨」の知名度向上にも貢献している。

- 茨城県 ^{しもつま}下妻市 (なし)
下妻市果樹組合連合会プロジェクトチーム
(代表者 ^{あわの}栗野 ^{としひろ}寿広)

産地 PR と新たな販売取り組みのために、平成 20 年に設立された若手有志からなるプロジェクトチームである。

産地自らが産地ブランド新商品「甘熟梨」を開発・提案して、生産・出荷・販売までを含めた販売の仕組み作りを実現している。チームメンバーが各自ほ場の 1 割程度を専用の「幸水」ほ場として確保し、契約販売の数量確保、品質確保に努めている。産地からの提案で、原価・販売店指定を実現し、近郊都市の 5 店舗で 9 日間の大規模な対面販売による戦略的 PR を行い、量販店の予想を大きく上回る好調な売れ行きを記録した。熟すことで品種本来の風味がでる「甘熟梨」について、消費者の理解が得られ、10a 当たりの所得で、慣行栽培よりも 20 万円程度高い収益を実現している。

技術面では、熟期促進のジベレリン処理は行わず、摘果基準徹底による早期摘果、満開後日数 125 日以降の収穫、表面色カラーチャート 3 での果皮色厳選により、高品質の「甘熟梨」生産を実現している。